様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 11 日現在

機関番号：24402
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：20520169
研究課題名（和文）鎌倉幕府と説話伝承文学との交渉についての研究
研究課題名（英文）A Study of the Relationship between the Kamakura Shogunate and Folkloric Literature

研究代表者
小林 直樹（KOBAYASHI NAOKI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40234835

研究成果の概要（和文）：鎌倉後期の遁世僧・無住の著作に、鎌倉幕府の法制度、とりわけ御成敗式目や武家新制の理念がどのように反映しているかを考察した。また、幕府の強力な支援を受けて仏教界の頂点に立った高僧・実賢の法流に連なる遁世僧と無住との深い交流についても明らかにした。さらに、無住と同時代に編纂された鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』の伝承性の強い記事を説話伝承研究の視点から分析することで、本書の歴史叙述の方法や編纂意識についても解明を試みた。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the influence of the Kamakura shogunate's legislative system, particularly of the concepts found in the *Goseibai shikimoku* and *Buke shinsei*, upon the works of Mujū, the reclusive monk of Kamakura-era. The study points out that Mujū interacted deeply with pupils of the high priest Jikken, who received strong support from the Kamakura shogunate and stood at the pinnacle of the Buddhist world. The study further investigates editorial attitudes and historical descriptive methods of the *Azuma Kagami*, or 'Mirror of the East', a historical document of the Kamakura shogunate compiled contemporaneously with Mujū, by analyzing the document's strong oral qualities from the perspective of folklore studies.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2008 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2009 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2010 年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：鎌倉幕府、無住、沙石集、吾妻鏡、源頼朝、北条泰時、北条時頼、武家新制

## １．研究開始当初の背景

（1）鎌倉幕府と文学世界との関係については、従来、軍記研究や宴曲研究、宇都宮歌壇をはじめとする和歌研究の分野においては考察されてきたが、こと説話集レベルの研究となると、『十訓抄』の撰者をめぐる研究が

行われている程度で、いまだ本格的な検討がなされているとは言い難い状況にあった。本研究代表者は、『沙石集』についての研究を手がける中で、この作品に鎌倉武家政権の影響が顕著に認められることに気づき、撰者無住と鎌倉幕府との関係を精査する必要があると考えるに至った。

（2）鎌倉幕府の準公的な歴史書『吾妻鏡』は、従来の文学研究においては主として軍記研究の分野で活用されてきたが、それらの多くは『吾妻鏡』の記述を「史実」と見なし、それに対比するかたちで「文学作品」の「形象」を見ようとする立場にたつものであった。だが、『吾妻鏡』の編纂材料には「文学作品」と同水準のものが多く含まれていることから、本研究代表者は『吾妻鏡』の伝承的色彩の濃い記事を説話伝承研究の視点により考察することで、当該伝承の真の意味合いとその背後に潜む歴史叙述の意識とを明らかにすることができるのではないかと考え、研究に着手した。

２．研究の目的

（1）鎌倉幕府に連なる御家人や元御家人の出家者らのネットワークと説話伝承文学の世界との交渉・関係の具体相を明らかにする。

（2）鎌倉幕府によって制定された御成敗式目や武家新制（関東新制）の理念や内容が、説話伝承文学の世界にいかに反映しているのかを明らかにする。

（3）鎌倉幕府の準公的な歴史書である『吾妻鏡』を説話伝承研究の視点から分析することで、その歴史叙述の方法や編纂意識について明らかにする。

３．研究の方法

（1）無住の著作において、鎌倉幕府の有力御家人中、もっとも注目される存在である安達景盛と、景盛の強力な支持を受けて醍醐寺座主・東寺一長者の地位につき、無住からも敬愛の視線を送られる金剛王院僧正実賢とその法流について、高野山大学図書館所蔵の関係資料や真言宗全書、高野山金剛三昧院文書、鎌倉遺文などを用いて精査する。

（2）無住の著作における御成敗式目や武家新制の影響について、中世法制史料集、『吾妻鏡』などを用いて調査する。

（3）『吾妻鏡』の伝承的要素が濃厚な記事のうち、重要人物と目される、源頼朝、北条泰時、時頼らの逸話を対象に、それらの記事が鎌倉後期に幕府周辺で彼らの事績を顕彰しようという意図のもとに選択され、布置されたものであるとの認識に立って分析を加える。

４．研究成果

（1）無住と鎌倉幕府との人的つながりに関する研究としては、幕府の有力御家人、安達景盛の強力な支持を背景に東寺一長者・醍醐寺座主の地位にまで上り詰めた実賢という高僧に焦点をあて、無住との関わりについて考察した。

まず、『沙石集』と『雑談集』に収められる実賢説話を分析することで、無住が実賢に少なからぬ関心と好意とを有している様相を明らかにした。実賢は「法愛」の人であるという点で無住と共通するほか、道理に感ずる「智者」であるという点において、その人物類型は「賢人」として無住が敬愛してやまない鎌倉幕府執権、北条泰時と相似形を成している。仏教界の頂点を極めた高僧と一遁世者という、一見対極的存在にみえる二人は、実は強固な心理的紐帯によって結ばれていたのである。

さらに、無住の関心は、実賢のみならず、その法流にも及んでいることを、高野山大学図書館に寄託される口伝・血脈資料などを調査することによって明らかにした。実賢は多くの遁世門の僧に付法しているが、そのうちの何人かの説話や著述が無住の著作に好意的に引かれているのである。無住は実賢流の遁世僧との深い交流の中で、実賢やその弟子たちの説話を入手したものと推察される。

なお、上記の考察の過程で、無住の著作に登場する「三輪山常観房ノ上人」が三輪流神道の祖とされる慶円と同一人物であることも突き止めることができた。

ここで考察対象とした実賢という僧は、従来、無住との関係においては、まったく関心を払われてこなかったが、実賢とその法脈に注目することにより、無住の志向する遁世僧としての本質的部分に迫りうる可能性を示した点に、本研究の意義が存する。今後は、さらに実賢流遁世僧の実態を解明し、無住の思想信仰面への影響を詳細に考察する必要があろう。

→〔学会発表〕②、〔雑誌論文〕④⑤

（2）無住の著作と鎌倉幕府の法制度との関わりをめぐる研究としては、主として『沙石集』における撫民的記事と武家新制との関係を考察した。

本研究においては、まず、『沙石集』に認められる撫民的記事を『吾妻鏡』の関連記事や弘長年中に発布された武家新制の条文と詳細に突き合わせながら分析し、そうした記事の形成が北条時頼の治世下になされた可能性が高いことを明らかにした。

また、北条泰時の御成敗式目の精神を継承

して、二度にわたる武家新制を発布し、撫民倹約の思想を鼓吹した北条時頼の時代には、武家倫理の強化された社会的雰囲気が醸成されていた可能性について、『沙石集』所載の北条時頼伝承や『吾妻鏡』収載の建長年間の孝子記事を素材に検討した。

さらに、時頼の両度の武家新制が発布された前後十年ほどの時期が、無住にとっては、西大寺流の律宗や、朗誉や円爾という栄西門流の禅と初めて出会い、交流を持った画期的時代であったことに着目、律宗はもとより栄西門流も戒律を重視したことから、無住も戒律に理解を深めている時期であることを明らかにした。一方、撫民倹約を説く武家新制は仏教の戒律と親和性の高い側面を有しているため、無住が新制の発布によって醸された社会的雰囲気を共感をもって受け止めたであろうと推測、『雑談集』に見られる時頼に対する高い評価の裏には、時頼が建長寺を建立して禅を興隆させたという点のみならず、時頼の時代に醸成された撫民倹約の社会的雰囲気も大きく与っている可能性を指摘した。

本研究は、武家新制という鎌倉幕府の法制度と文学との関わりを初めて俎上に載せた考察という点で国文学・歴史学双方の領域において意義を有するものである。なお、ここでは無住と時頼の政策との影響関係について主として西大寺流律宗を介在させることによって捉えようとしたが、今後は禅宗の関与する側面にまでさらに視野を広げて考察する必要があると考える。

→〔学会発表〕①、〔雑誌論文〕①

(3) 鎌倉幕府の準公的な歴史書『吾妻鏡』の伝承的記事の研究は、以下の二点を中心に行った。

① 鎌倉幕府初代将軍源頼朝の伝承的記事（観音伝承）に注目し、これを『吾妻鏡』の中でもっとも枢要な位置を占める人物、北条泰時に関わる伝承的記事（補陀落渡海伝承）とあわせて考察することにより、両者を結ぶ歴史叙述のあり方について分析を行った。

まず、頼朝については、治承四年の挙兵以来、頼朝自身が戦の陣頭に立ったのは、石橋山合戦と奥州合戦のわずかに二回のみであるにもかかわらず、その二回ともに『吾妻鏡』においては頼朝の持仏・聖観音の霊験記事が記される点が注目される。『吾妻鏡』編者が聖観音の縁起的記事を意図的に導入することで、頼朝の生涯を聖観音の加護のもとにあるものとして描き出そうとした歴史叙述の意識を明確に看取できるのである。

一方、『吾妻鏡』において頼朝亡き後の時代に関するめぼしい記事はほとんど見られなくなるが、唯一の例外が天福元年に記される下河辺行秀（智定房）の補陀落渡海伝承である。だが実は、行秀の伝承を将軍頼経に語るのは北条泰時であり、当該伝承は、むしろ一種の「泰時伝説」として捉えるのが適切であると判断される。頼朝の精神を体現する意味を担う『御成敗式目』の制定と関わって、当時の泰時は頼朝を強く意識して行動しており、頼朝時代の御家人行秀の逸話を頼経に語る泰時の行為もその一環であった。ただ注意すべきは、泰時のこうした行動自体が虚構を多分に含む「伝説」である点で、そこには『吾妻鏡』編者の、泰時を頼朝の精神の忠実な継承者として描き出そうとする歴史叙述の意識が明らかに看取される。さらに泰時が語るのが観音ゆかりの伝承であることから、この「泰時伝説」には、頼朝の生涯を観音の加護のもとに描こうとし、かつ泰時を頼朝の精神の継承者として造型しようとする『吾妻鏡』編者の歴史叙述の姿勢が交差するかたちで結晶しているものと認められるのである。

→〔雑誌論文〕③

② 鎌倉幕府第二代将軍源頼家の伝承的記事（狩猟伝承）に着目し、これと北条泰時やその孫、経時・時頼兄弟の同様な伝承的記事とを対比的に考察することにより、『吾妻鏡』の歴史叙述の姿勢や編纂意識を明らかにしようとした。

『吾妻鏡』における頼家の狩猟伝承といえば晩年の富士の人穴探検譚が著名であるが、建久四年五月に行われた頼家の初狩の折の矢口祭記事も同じく富士の神に関する伝承として注目される。従来、当該記事は同じ月に起こった曽我兄弟の敵討ち事件との関連で読まれることが専らであった。だが、『吾妻鏡』において頼朝の先例に反する頼家の行動が頼朝の精神的継承者たる泰時の行動と対比的に描かれる傾向が顕著に見られるところからすれば、頼家の矢口祭記事は、実は建久四年九月に行われた泰時の矢口祭記事との対比が図られているものと判断される。そして、そこから読み取れるものは、頼家の矢口祭における富士の神との円滑を欠く関係であり、それは後年の人穴探検記事における富士の神の禁忌の侵犯と呼応する記事として布置されているものと推定される。つまり『吾妻鏡』編者は武家の人生の明暗を、その人生のいわば出発点に位置する矢口祭儀礼の首尾如何によって描き分けようという歴史叙述の意識を有していたのではないかと思量され

るのである。
　上の点は、北条泰時の二人の孫、経時と時頼の伝承をめぐっても指摘できる。『吾妻鏡』嘉禎三年七月に見える経時の矢口祭記事と時頼の流鏑馬習礼記事は明らかに対比的に布置されており、その後の二人の人生の明暗を関連付けて説こうとする編者の意図は明白である。よって、武士の将来の明暗を矢口祭と関わらせて暗示したり、明暗の分かれる人物を対比的に叙述したりという『吾妻鏡』の手法は、本書の編者が方法的な自覚のもとに行っていたものと推定されるのである。
　→〔雑誌論文〕②

本研究は、『吾妻鏡』の伝承的記事を、本書中でもっとも潤色が目立ち、編者の意図が濃厚に反映するとおぼしい北条泰時の記事（「泰時伝説」）と対比的に考察することから、『吾妻鏡』の歴史叙述の方法や編纂意識を浮かび上がらせた点に意義があり、歴史学や思想史の分野における『吾妻鏡』研究と補完しつつ、研究の進展に寄与しうるものと考える。今後、『吾妻鏡』の主要登場人物の伝承的記事について、さらに考察を広げていく必要があろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
① 小林直樹、「無住と武家新制―『沙石集』撫民記事の分析から―」、『長母寺開基無住和尚七百年遠忌記念論集』、査読無、2011、（掲載確定）
② 小林直樹、「『吾妻鏡』における頼家狩猟伝承―北条泰時との対比の視点から―」、『国語国文』、査読有、80 巻 1 号、2011、pp. 1-20
③ 小林直樹、「『吾妻鏡』における観音・補陀落伝承―源頼朝と北条泰時を結ぶ―」、『文学史研究』、査読無、50 号、2010、pp. 23-37
http://jairo.nii.ac.jp/0150/00000295
④ 小林直樹、「無住と金剛王院僧正実賢の法脈」、『説話文学研究』、査読有、44 号、2009、pp. 93-103
⑤ 小林直樹、「無住と金剛王院僧正実賢」、『文学史研究』、査読無、49 号、2009、pp. 55-64
http://jairo.nii.ac.jp/0150/00000299

〔学会発表〕（計２件）
① 小林直樹、「無住と武家新制」、研究集会「無住―その思想とテクストをめぐって―」（名古屋大学比較人文学先端研究）、2010 年 12 月 24 日、名古屋大学
② 小林直樹、「無住と金剛王院僧正実賢」、説話文学会、2008 年 6 月 29 日、熊本大学

６．研究組織
(1)研究代表者
小林　直樹（KOBAYASHI NAOKI）
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：40234835

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし